

SHIMIN PRESS の
バックナンバーは
インターネットで
ご覧頂けます。
WEB SHIMIN
http://www.shimin.info

SHIMIN PRESS

市民プレス：第11号

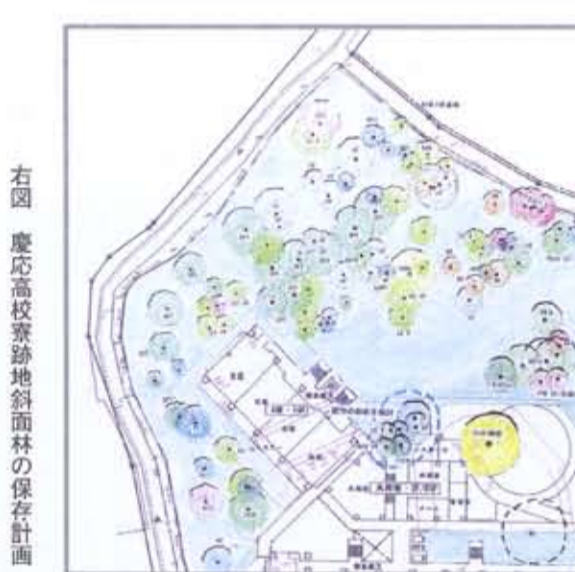
2003年08月01日
(隔月刊、無料配布)
発行人 特定非営利活動法人
「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作・印刷 デジタル工房
FAX 048-476-9111
〒353-0004
埼玉県志木市本町5-18-24

緑のまちづくりは 確かな足取りで

慶応志木高校寮跡 地の緑を保全する ための三者協議は 合意に

本紙がこの開発計画の取材をはじめたのは、2002年11月(本紙6号)のことであった。「慶応高校の緑に想いを寄せる会」が1100名に達する署名を集め、行政当局、事業者と住民が対等な立場で協議するという全く新しいプロセスがスタートして一年半がたつ。多くの議論が交わされたが、いまその実結は、緑の中核を為す「斜面林」を保全する三者の協議は、このたび合意に到達した。

慶応志木高校寮跡地の開発の三者協議では、緑を残すためのワークショップが8回も開かれ、既存樹を詳細に調査して保存計画を立て、これと調和する建物を設計するという考え方が取り入れられた。大型の宅地開発において、このような経過で緑を保全することになった事例は稀であり、モデルの一つになるものと思われる。



右図 慶応高校寮跡地斜面林の保存計画

「次世代に継承する森の保全と育成」を開発のコンセプトとして議論が進められた。「緑を想う会」のメンバーには、市の基本計画の策定に関わってきた方、行政との両輪で自然保護活動をされてきたNPO「エコシティ志木」のメンバー、慶応高校で教鞭を取り、あるいは長く近隣に住み、慶応高校以前、松永安左衛門氏の率いる東邦産研研究所、後のサンケン電気に勤めておられた方々など、緑の保全に並々ならぬ熱意をもった市民の方々が全力を傾注した。



右写真 工事中の寮跡地、中央にシンボルの銀杏

去る7月30日、「緑に想いを寄せる会」は、志木市長に対して、つぎの

ような要望書を提出した。また同様の要望書を8月12日に、事業者の三井不動産株式会社、三菱地所株式会社に対して提出した。以下はその要旨である。

と育成をコンセプトプランとすることを受け入れられたことに敬意を表します。誠実かつ真摯に住民との対話を重ね、「緑のまちづくり」を支援し、ときには英断を下されたことに対して深甚な謝意を捧げます。協議の結果、キャンパスのシンボルであった株立ち大銀杏を含めて、六割を超える緑の保全に辿り着くことができまし

平地林 ハケノヤマ は消えた

朝霞市浜崎、朝志ヶ丘に広がっていた広大な平地林「ハケの山」が大規模な開発のために突然消えたのは、昨年三月のことだった(本紙3号、2002年4月)。



上写真 「ハケの山」開発の現場
右下写真 東武東上線の線路に沿って建設されるマンション582戸
下写真 かつてのハケの山



雑木林の悲鳴が聞こえる

徳川将軍の鷹狩りの時代から、四季折々の静かなときを刻んできたハケの山は、大正時代に入っただけで、東武東上線が開通した折りに分断されたが、線路に沿って、緑の安らぎの空間を形作ってきた。志木駅に近く、これと一体になった緑の景観、四季折々の変化は、乗車する人々、特に通勤者の心を和ませ、この一帯には樹木の芳しさが漂っていた。

この計画が明らかになるや否や、近隣の住民は立ち上がり、署名活動も始まり、事業者との協議、行政への陳情が行われた。抗議のスピールも繰り返された。ついには樹木伐採禁止を求める仮処分が裁判所に申し立てられた。

しかし、朝霞市は開発許可を出す。たごころにかけ替えの無い平地林の伐採が始まり、大規模な高層住宅の建設はみるみる立ち上がっていった。状況は慶応高校の寮跡地の開発とは大きな違いを見せた。

惜しむべし、かけ替えの無いハケの山の消失、歴史を刻んできた平地林の伐採。行政と事業者、そして住民の三者に、自然、景観に想いを馳せ、緑を後世に残す決意に何がしかの弱さはなかったか。

この書は、「慶応の緑に想いを寄せる会」の熊谷 晃氏が、東邦産研電気(株)に入社した折、松永氏から受領されたもので、ここに設立された

東邦産研電気(株)は、ここに設立された

4月13日、朝霞・志木・和光・新座四市の合併の是非を問う住民投票が行われ、和光市民の反対が賛成を上回ったため合併協議が白紙に戻ったことは、まだ記憶に新しいです。

反対票が上回ったのは和光市だけの事情による。だから三市で合併協議をとう進め方は性急に過ぎてはいませんか。(新座の一市民)

投稿欄

三市合併を急がないで！
朝霞、志木、新座各市の意識を尊重するため、三市の合併協議会の設置をという声が上がっている。この請願は、各市の議会において賛成多数で可決されたとのこと。しかし、ベースが少し早過ぎはしませんか。

平成十三年に合併協議会が設置されたから、その論議に二億円の財源が費やされたそうだが、市民にとっては空しく感じられます。四市合併が否決されたいま、近隣の自治体は胸襟を開き、広域の行政の連携について考えるべきです。各市の首長は先頭に立って話し合うべきではないでしょうか。

負担は軽く、しかもサービスは高くということ、確かに市民は願っています。しかし数字だけでは足りないのです。各市の市長、議会議員各位は、暮らしの内容、質に立ち入ってビジョンを示すべきです。このことを特に要望します。



大和田通信基地 その一 日本海軍の大和田通信隊

歴史教育者協議会 金子 眞

九十本の黒い柱

一九四三年の春、私は大和田小学校高等科(新座市)に入学しました。農業実習で西堀地区の畑にきつまいもの苗を植えに行きました。

平林寺の雑木林を抜けると広い畑の中に、林のように木の黒い柱が立ち並び、柱と柱の間はアンテナが四方八方に張りめぐらされ、ガラスの器具が風に揺られて光っていました。

これが日本海軍の大和田通信隊の基地だったのです。海のない埼玉県に海軍の基地があるのにびっくりしました。

太平洋戦争の通信基地

一九三七年日中戦争が始まった年にアジア太平洋地域の受信専用の基地として大和田町(新座市)西堀に工事が始まり、一九四一年、太平洋戦争が始まる年に完成しています。その広さは現在とはほぼ変わらず三〇万坪といわれていました。中央の中心施設と官舎

は違い、横書きで、日本語と英語の二つの表記になっています。当時英語は敵国語で、使用することは禁止されていたのに、ここ大和田通信隊では、英語情報を傍受し、解読していたことがわか

ります。今では見ることもできない九十本の黒い柱が、日本の歴史の上で重要な基地であったことを記録にとどめました。(金子さんは新座市在住)

の部分は六万坪あり、当時四戸の農家は坪一円の補助金で立ちのいたといわれています。

施設には、大型受信機二十三台、小型が二百台設置されていました。九十本の黒い柱には、ハワイ、シンガポール、マニラ、グアム、台北、沖縄など木札が張られていたのを見ると、アジア、太平洋地域の日本軍の電波はもろろんのこと米、英の無線も傍受していたものと思われま

す。昭和二十年の六月の傍受月報(防衛研修図書館蔵)によると、この基地に三十一名の士官と三百五十三名の兵隊が働いていましたと記載されています。また「グアムの周波数変更」(日本本土への空襲に対する援護機の周波数)などの記録があります。

一九四一年十二月八日、真珠湾からの暗号電報「トラ・トラ・トラ」を受受したのもこの大和田通信隊とか、「ポツダム宣言」の受信もこの通信隊だと伝えられています。

一九四五年九月三十日の日付の入った占領軍(第一騎兵師団)施設引渡目録というのがあります。大和田通信隊の目録は、他の通信隊のもの

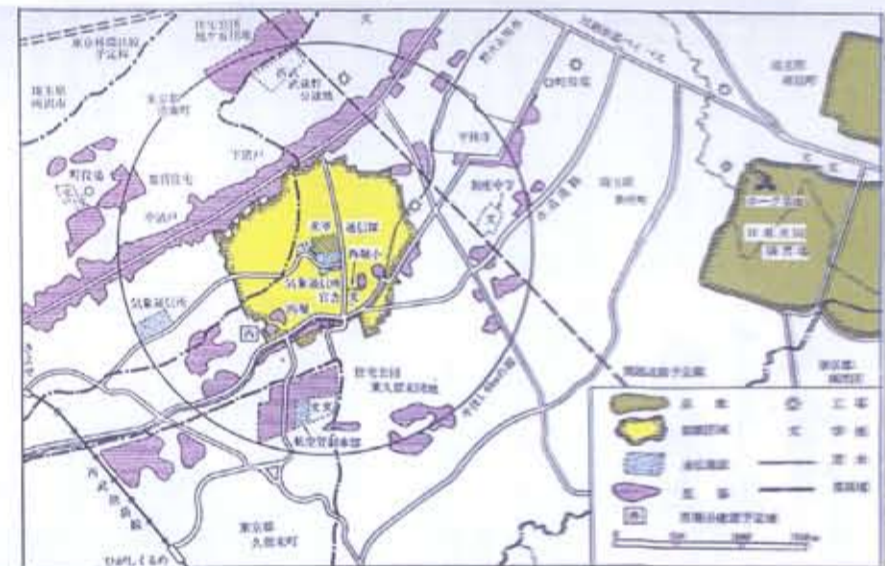
ではどうしてこの大和田に通信基地をつくったのでしょうか。それは第一に武蔵野台地の中心にあたり、日本では稀にみる通信上で気象状態が安定しているところ、第二は平林寺を中心とした森林地帯で、道路も少なく東上線、西武線からも離れ、電波障害が少ないこと。第三に、畑が広がり農家が点在するだけで、住宅が少なく、電波障害がない地域であるなどの理由を挙げることができ

ます。

資料1(下図) 関越高速道ができる前の周辺の基地昭和44年1月「地理歴史教育」を参考にしました。資料2(左写真と地図) 航空写真、昭和58年11月13日撮影。「空から見た埼玉28市」日本交通公社出版局



上写真 米軍の最新型アンテナ 大和田通信基地 「武蔵の国にひくら」 いちい書房、1987年刊より



大和田通信所は いま...

大和田通信所は、防衛庁、防衛施設庁のもとに置かれていた。直接管理に当たっていたのは東京防衛施設局である。

施設の区域を示すブリキ板の標識(写真1)が、フェンスに取り付けられていたが、その標示によると、新座市西堀三丁目、本多二丁目をすっぽり包んだ地域で、一部は都内清瀬市にも跨がる広大な緑地である。

新座市野火止、平林寺の山林の南東に位置しており、東西に走る陣屋通りと、水道道路との間を占めている。「富士見新道」が通信所区域の中央を南北に走り、その東側には市営総合運動公園、本多緑道と野火止用水路の一部が含まれている。

富士見新道を北に向かつて左側は、すべてフェンスで区切られ、その中にゲートがあるが、普段は施錠されたまま(写真2)。奥には、米軍が使用中とみられるいくつかの建物が垣間見られるが、人気は無い。遠くの森の奥に、高い鉄塔が見え隠れする(写真3)。

陣屋通りに面して、一列並びの民家があるが、記者が訪れた日は旧盆の入りで、提灯を下げた家

族が、揃ってお参りに向かう光景が見られた。陣屋通りが聞こえる。民家の裏はフェンスに囲まれ、武蔵野の原野とも見える樹林が連なっている。たった一つ残された鉄塔がその間に見える(写真4)。

かつては畑の中に九十本の木の柱が立ち並び、柱の高さは、六メートルもあって、それを支えるために、千八百本もの鋼線が畑に張りめぐらされていた。柱と柱の間にはアンテナが張られていて、雨のしずくや、鉄さびのため、野菜もつくる

ことができなかったというが、これを偲ぶことは難しい。

通信基地内には、海軍将校の官舎が何軒も立ち並び、家族と共に住んでいた。また周囲の民家に下宿していた士官もいた。当時は重要な任務を帯びた基地だった。敗戦によって、ここ通信隊の毛布が近くの家に配給されたが、その毛布は素晴らしいもので、おそらく今日でも最高級品に違いない。この毛布を一つを取っても、この基地には高級将校が集まっていたことが分かる。

もはやあの林立する柱も、アンテナも、官舎もその姿を見ることができない。終戦から半世紀あまりが過ぎたが、大和田通信所の大地は緑に包まれ、静かに眠ったままだ。



右・写真2



左・写真4

右・写真1

あなたへの メッセージ

志木に生まれて 九十年

吉江正男さんは、大正二年(一九一三)、志木市本町二丁目、敷島神社の傍で生まれた。富士通には野島機屋(はたや)さんがあって、衣料や絨織をつくっていた。吉江さんは十六歳から村山快哉堂(廃業して、店舗は親水公園に移築された)に住込みで働いていた。以下、思い出すままに語って戴いた。

聞き手・安斎達雄

市場通り

市場通りは、西側が県道、東側が町道になっていて、自動車が走るのには西側だけだった。だから、一車線を北へ行く車と南へ行く車とが走っていたわけだが、車が通ること自体が珍しい時代で、特に支障もなかった。

市が立ったのは東側の町道である。しかし、大きな市が立つときは西側も使った。二月二日の旧正月にたつ市は特に賑やかで、スリも出たほどだった。通りの中央を流れていた野火止用水の両側には、銀杏が植えられていた。市場通りには、酒屋・うどん屋・豆腐屋・魚屋・床屋・風呂屋

などが立ち並び、水子・南畑などからもお客が集まってきた。

乗合自転車

当時、村山快哉堂では薬局のほかにも自動車部をもち、乗合自動車を走らせた。最初は志木・所沢間、少し遅れて志木・東村山間、志木・朝霞間に乗合を走らせていた。バスという言葉は、この辺りではまだ使われていなかった。志木・朝霞間に乗合自動車を走らせることになったのは、朝霞に紙幣を使う紙の工場が出来ることになり、その通勤客を当て込んだからだ。しかし、工場建設計画は実現されず、運行も取り止めとなった。

浦和の方面から、自転車にのった少年が、わらわらと入った納豆をよく売りに来ていた。

旅館は江戸道にあったが、市場通りの料理屋さんの「伊勢屋」「田中屋」でも人を泊めていたようだ。昼間から芸者をあげる人もいた。

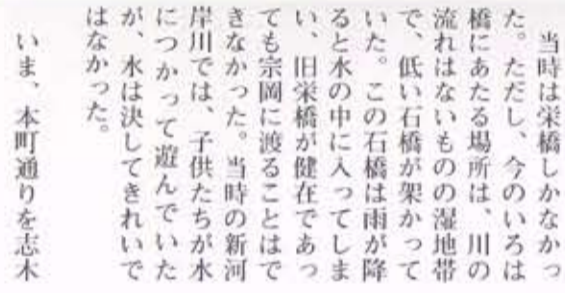
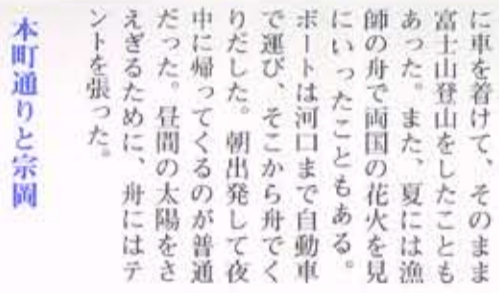
何軒かの開業医院があったが、その玄関先には必ずといってよいほど人力車が待っていた。当時、医者往診は人力車で呼ばれていた。薬局は村山のほかに原さん内田さんがひらいていた。それぞれ店売りが主だったようだが、配達もした。配達先は遠方というよりは近場が主で、多くは自転車が使われたが、吉江さんは時にはバイクで配達にあたった。どちらかというと、村山快哉堂では薬の製造に力をいれていたのだが、原薬局では、医者に薬を届けたい場合、「医者回り」に力をいれていたようだ。

脇に旗を出しておく方法もとられた。上り・下りで赤・白に分かれていた。志木・浦和間の乗合自動車には、赤・白の旗を出した。降りるときは、手を上げればどこでも降りることができた。

吉江さんも若いころ、何度か乗合自動車の運転をさせられたことがあった。



池田 要(かなめ)氏
制作
切り絵になった市場通り
(本紙九号二頁参照)



た。道路には信号も横断歩道などはなく、車が珍らしい時代なので、自動車の前に子供が飛び出してくるので注意が必要だった。東村山行きは乗合自動車は、のちに多摩湖バスに買収された。

村山快哉堂では、毎年一回、一泊の乗合自動車旅行をしていた。店で働いている人だけではなく、近所の人も呼んだ。旅行とは違うが、ご息子が結核療養のため河口湖に出掛ける時など、主人の弥七さんも同道で車を河口湖まで飛ばし、そこに車を着けて、そのまま富士山登山をしたこともあった。また、夏には漁師の舟で両国の花火を見に行ったこともある。

ボートは河口まで自動車で運び、そこから舟でくわだした。朝出発して夜中に帰ってくるのが普通だった。昼間の太陽をさえぎるために、舟にはテントを張った。

本町通りと宗園

当時は架橋しかなかった。ただし、今のいろは橋にあたる場所は、川の流れるはなれもの湿地帯で、低い石橋が架かっていた。この石橋は雨が降ると水の中に入ってしまった。旧架橋が健在であったも宗園に渡ることはできなかつた。当時の新河岸川では、子供たちが水につかって遊んでいたが、水は決してきれいではなかつた。

いま、本町通りを志木

駅に向かうと、双葉町のバス停の手前で二手に分かれる。右手の道は東上線の下をくぐり抜ける。江戸時代からの古い道で「旧道」とよばれている。左手の道は丸井にぶつかるとなっている。大正三年(一九一四)に東上線が引かれ、志木駅が出来るとき、駅に向かう道として新しく作られたもので、「停車場新道」と呼ばれていた。旧道には点々と店が建っていたが、新道には吉田屋という料理屋が目立っているだけだった。

そのかわり、旧道との分岐点から志木駅までの道には、桜の木が長いトンネルが続いていた。

また、架橋手前から新座市の大和田に抜ける「防衛道路」は、架橋手前から星野石屋さんまでの間は戦後新たにつくられた道路だが、そこから南の新座寄りの道は当時からあったものだ。

当時、宗園は田んぼばかりで、家がぼつぼつとあつた程度だった。川魚料理の「鯉清」からは宗園小学校を見通すことができたほどだ。また、当時の宗園では狐銃を使った狐が許されていた。獲物はもっぱらカモだ。吉江さんは狐をたしなむ父親に連れられ、腰に獲物のカモをぶら下げさせられたという。

井戸水汲み

子供のころの遊びは、べーごま・めんこ・兵隊ごっこ・たこあげ、女の子だったら縄飛びなど、ほかの地域と同じような

ものだろう。こどもの仕事として思われるのは、井戸の水汲みだ。各戸ごとに井戸があつたわけではなく、どこかの家の井戸を共同で使うのが普通だった。吉江さんの家では、近くに桶を天秤棒でかきいで毎日井戸水を汲みにいった。道路は舗装されていなかったため、乱暴に歩くと、泥が跳ねあがつて桶に入り、よくおこられた。風呂を沸かすときは、何往復もしなければならなかつたので、特に大変だった。同じ井戸を使っている家々では組合をつくり、掃除を分担した。かつての井戸組合がもつた十軒ほどの「組合」がいまも残っていて、お葬式ときなどお互いに手伝っている。

この辺りのお祭りといえば敷島神社のお祭りだ。今は七月の夏祭りになっているが、当時は五月十日に行なわれ、神楽も催された。ほかに、節分の豆まき、お炊き上げなどが行なわれた。お炊き上げとは富士山(田子山富士)の火祭りのことだ。多分八月二十六日だったと思うが、富士吉田の山じまいの日と合わせて、境内の三箇所から皆は、その燃えカスの藪がほしくて取りにいった。その藪を軒下に向けて置くと、火事除け、災害除け、安産のまじないになったからだ。それこそ皆は藪を奪いあつた。

忘れられぬ風景

開門式の志木の水門

新河岸川のイロハ橋より下流に、かつてモダンな水門が造られていた。この水門はパナマ運河に見られる開門式の設備をもっており、昭和四年、当時の最新技術を駆使して築造された。しかし昭和五十四年に取り壊しが開始されて、いまは「親水公園」の一部となっている。

明治四十三年に遡る。

この年、荒川、新河岸川の流域は大洪水に襲われた。この被害に対して取られたのは、堤防の築造と川の流れの直線化であった。しかし江戸時代から続いていた新河岸川の舟運は、九十九曲がりど歌われた緩やかな水路によるものだったので、

これらの水害対策は、舟の運行を危機に陥らせた。そこで考えられたのが、上流と下流とを段差で区切り、舟運のために開門を作ることであった。

しかしこの開門が完成してから間もなく、大正三年、東武東上線の開通によって舟の運行は止まり、開門はその使命を終えたのだった。

これに追い討ちをかけたのは、激しい川の汚染であった。敗戦後、新河岸川の流域では、工場と住宅の建築ラッシュに見舞われた。工場排水、家庭雑排水の流入によって水門の汚染は耐え難いものになってしまった。

「志木の水門」
大木新司氏作品
第二十九回創造展
(東京都美術館、6/13
25、1976年)
志木市郷土資料館所蔵





http://www.hiachi.co.jp/
New/News/2001/
0628b/

「ユビキタス」

クレジットカードや、現金の預入れ、引き下ろしに使うバンキングカードから、鉄道のプリペイドカードなど、ICカードの普及は目覚ましい。さらにIC技術の進歩は止まるところを知らず、今、より小さく、そして安く、カードからチップ、タグへとその姿を変えつつある。

総務省はユビキタス技術の将来像を公表した。どこでも多様なネットワークにアクセスでき、様々な情報を得ることが出来る「ユビキタスネットワーク」に、産業界から大きな期待が投げ掛けられている。

ICカードからICタグの時代へ

答え IC = Integrated Circuit 集積回路のこと。半導体の基板の上で、トランジスタ、ダイオード、抵抗器などの回路を配線で結んで様々な機能をもたせた素子のこと。易しく言えば、電気の回路を小さい基板の上にまとめたもの。

最近ICには、電波によってエネルギーを得、無線で通信する機能が加わり、非接触型のチップを取り付けたカードが実用化された。かざすだけで改札口が通れる鉄道のプリペイドカードも利用される。0.3ミリメートル角の微小な非接触型ICチップが開発され、量産化へと進んでいる。新しいIC時代は目前に迫っているようだ。(参考サイト)

走行中の自動車や、子供やペットの付けたチップなどの近傍ネットワークによって、急な飛び出しを検知し、オートブレーキを掛けて安全を確保する。お客のもつICカードや商品のICタグが連携して、レジをただ通過するだけで、購入と決済が完了する。小型チップを実装したカードのほか、情報端末、携帯電話、指紋、虹彩などのバイオメトリクスを用いた多様な認証システムによって個人を認証するプラットフォームを構築する。

視覚障害者が道路や家の中のセンサーネットワークにより、位置の情報や周辺の情報を捉えることができる。バリアフリーの環境の実現にも役立つ。 etc. etc.

例えは超小型チップを使うネットワークによって、食品や薬剤の品質の保持期限を管理する。タグのついた食品、薬剤の情報は、ネットワーク上でいつでもアクセスできる。無線でキャッチするか、インターネットを使って遠隔地からも知る事ができるのだ。帰宅時に外出先から自宅のコントロールシステムを設定すると、位置の情報など連携して、空調、炊飯器、風呂の給湯などが帰宅時に整うように動作を開始する。

高層住宅の防災は大丈夫？ 東京エリアの危険度は世界一！



高層からの眺望は魅力的だ。いま地域に建設されるマンションは14、15階のものが多くなっているが、購入する前に、防災の観点でチェックすることは是非とも必要なことであろう。

今年の5月、東北地方を襲った地震のとき、仙台市青葉区の高層マンションの24階に住む男性は、外に出るべきか、中に残るべきか、基本的なことが分からない状態だったという。震度は4ないし5、海に浮かぶ船のような揺れを感じていた。

ドイツの再保険会社が今年3月に公表した、東京エリアの自然災害の危険度指数は、世界で突出していた。世界1位で、2位のサンフランシスコの4倍以上、ニューヨークの約17倍であった。阪神大震災では、電気の完全復旧まで一週間かかった。最低三日は自分の力で凌ぐ構えが必要だ。

もし増築することになれば、自治体にとって財政的な負担となる。建設計画と平行して事前の協議は必須のはずだ。

国土交通省の99年度の調査によると、マンションの管理組合の6割以上が、地震などによる大規模な災害への準備を何もしていないと答えたという。地震のとき、大規模な火災の可能性がある住宅の密集地は全国で約八千ヘクタール、人や巨大なビル、高速交通などが複雑に絡み合う大都市は、地震のとき、個々の被害が次々連鎖的に拡大する弱点をもつ。



右写真 志木市本町5丁目の高層マンション現場
左写真 その南側の建物は現在平屋だが、高層ビルに立て替えられると、日照は失われる恐れが大きい

高層マンションを購入するときの心構え

次々と日照を奪う南側の高層ビル

ウォッチング

右写真 志木市本町通り恒例の「色波市」 終りを告げる夏夕べに「サンバ」は行く



左写真 ヒガンバナ



特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」 この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布します。